

山鹿素行の教学観の学統における展開

——学統継承者の教学観を中心に——

内 山 宗 昭

はじめに

本稿では、山鹿素行（一六二二—一六八五）の教育方法観並びに学校論等が、その学統継承者の中でいかに理解・受容されあるいは変容していったかを明らかにすることを基本的な関心としながら、学統継承者の主だった者の教学観に焦点をあてて考察を試みる。ここでは素行と継承者の間の具体的な教育論の対応関係等を考察する前段階として必要な全体的な状況・特色を概観し考察することを目的とした。

素行の教学観の後代にかけての影響、受容並びに展開を考察するにあたっては、素行の学統が古学ではなく兵学上に形成された事由から、山鹿流兵学の学統の面から探求しなければならない。このことは教学観の受容に関して、闇斎学、徂徠学等其他の学統に比較して異質であるため検討が要されるが、素行の教育観自体が武教の成立に伴って形成されたという特質を持つとともに、山鹿流兵学が教学

論を重要な内容としており、学統継承者に武教的特質を持つ教育論が展開しているという実態を明らかにする過程で目的を達すると考えている⁽¹⁾。

山鹿流兵学の学統自体に関しては研究が進んでいるが、本稿では、まず山鹿流兵学の教学的性格を教育思想史の観点から明らかにしながら、その内容となる『武教全書』の受容等について概観する。そして、学統の中で特に教学論の展開上重要と思われる継承者を津軽系の学統から、山鹿高恒、山鹿素水を中心にとりあげて考察する。

（一） 山鹿素行の学統と武教

山鹿流兵学は、七書並びに甲州流・北条流兵学を土台として形成、発展したが、山鹿流の特色はその教学的性格、武教的特質が顕著である点にある。教育思想史の観点からみれば、内容的に「寺子屋公営論」等の学校論、あるいは武士の子弟対象の「発達」を考量した教育方法論等の具体的教育論をも含むものであった⁽³⁾。兵学と経学の

一体化の中でそれを結ぶところに教学論を位置させるため、それらは重要な要素となつていたのである。

他流兵学におけるこのような意味での教学論としての要素を比較検討してみると、特に北条流兵学はその教学的性格が山鹿流に近似していることが理解される。山鹿流の母体の一つと評価される北条流であり、また両者は学統継承に際しても同時に継承される場合もみられるなど極めて近い関係にあった。しかし北条流自体に山鹿流ほど具体的教学論が展開されるのを見出すことは出来ない⁽⁴⁾。

越後流要門派の沢崎景実の著作中には以下のような随年教法に類する説がみられる。

一、人生れて三歳までを子と言ひ、髪して童と呼び、教を教へ、色をしらしむ。

一、七歳にして袴着す。是より兒と言ひ、小弓・手習・舞雅の曲を翫び、十三にて肩伸ばす。結て、軍礼をならひ、弓馬・劍戟の芸を学ぶ。一、十五にして齒堅す。甲を帯びて武学を勤め、正統の大路に志す。十八にて冠着す。習芸を極めて仕官に付く。是より鍛錬をときなむ。⁽⁵⁾

また長沼澹斎の長沼流兵学に、「養ひて教ゆるの道は、鄉村に塾を設け郡国に学校を立て、教授官を備へ経書を置き費用を弁じ、士民の子弟を入れて之を教ゆ。塾に書数を学び経書を読み、学校に字を解し義を講じ、人人をして物に格り知を致し己を修め人を治るの道を知らしむ⁽⁶⁾」のように、学校論が見られるが、それ等は兵学中に見られる教育説として注目すべきものではあるが、山鹿流との比較の上では、きわめて断片的な記述と言わざるをえない。近世中葉

以降特に北条流、長沼流の兵学者に教学論を体系化する仕事をなした者もみられたが、他流と山鹿流とを比較すると、山鹿流の教学的、武教的性格が顕著にみえるのである。

山鹿流兵学では素行著『武家事紀』に集大成されているような知識の全体、即ち歴史上の政権の推移や諸家家臣の記録、法制、地理、武具の用法、築城法、戦略、武士の諸作法を含む武家故実等を子弟の教育内容として「実学」に相應しいものと考えていた。

皇統要略 武統要略 武朝年譜 諸家譜伝 諸家陪臣 戰略
地圖 法令 式目 地理 地理図 将礼 年中行事 職掌 故実(中略)

将礼 御誕生 御行始 御著袴 武具始・乗馬始 武芸 御詠書・御手習

「武家事紀目録」中には、右の項目がみられ、『言綴録』にも、「凡そ幼主平日の学は、唯だ古今の勢を審にし地勢人情を知るにあり。今かの九州・中国・五畿・北陸・南海・関東・奥州の諸列侯、その家譜その土地その軍功忠義、家の興廢、列国群臣の譜及び言行、日々以てこれを審にす。これ本朝の武学なり⁽⁷⁾」とある。素行は日本の学問の歴史を省察して、大学寮、天皇の学問、武將の学問、いづれの学問形態・内容についても、それが為政者の学問として具体的知識を欠き不十分であったと指摘しており、素行はそれを満たす教学を企図して山鹿流確立を目的としたといえる⁽¹⁰⁾。したがって山鹿流秘伝伝授において中心となった『原源発機』の易学思想等の基礎にさえも、前述の知識、殊に日本の武家に関わる知識の習得がその

最も根幹となるとみなされていた点を看過すべきでないと思われる。

素行の学統のうち有力なものに、平戸山鹿家、弘前山鹿家の二大学統（本支流を含む）があった。ことに教学思想の鼓吹という点では弘前津軽系学統とその傍系に著名な学者が出、教学論を述べているのが注目される。山鹿流兵学は諸藩に伝播したが、二大学統以外では金沢藩、水戸藩、萩藩等に影響力のある学者が輩出した。⁽¹²⁾

学統概略図⁽¹³⁾

平戸山鹿系学統

素行―高基―高道―高武―高賀―高忠―高元―高満―高紹―高
通―

津軽山鹿系学統

素行―高恒―高豊―高直―高美―高補（素水）―高幸―高敏―高
朗―

津軽貴田系学統

素行―貴田元親―貴田親邦―津軽耕道―貴田親豊―大瀬実貫―貴
田親健―貴田惟邦―惟猷―惟良―黒石貞幹―貴田同邦―

赤穂系学統

素行―大石良重―菅谷政利―大田利貞…黒野義方―窪田清音―若
山勿堂―

金沢有沢系学統

素行―関屋政春―有沢永貞―
有沢武貞―貞幹―
有沢致貞―盛貞―命貞…

萩系学統

素行―高基―吉田重矩―矩行―檜崎美政―吉田矩定―石津法正
―林真人―吉田松陰―

（直系のみを記した。傍線は教学論の継承・展開を見る上で特に
重要と考えられる人物。）

他に水戸藩、松江藩、磐城三春藩、伊勢藤堂藩、熊本藩に学統が
あり、二本松藩、高田藩、沼津藩、大垣藩、綾部藩、高松藩等で藩
学の一つとして講じられた。⁽¹⁴⁾

山鹿流兵学の基本書として最も流布したのは『武教全書』で、後
代にかけてその写本、版本が多く出ている。また『武教全書并解』
『武教全書詳解』等の注釈書・解説書がそれに含まれる。

本書の序段及び巻一の「主本」「撰将」「用士」の項に関して、
項目の解説として、武教の意義をはじめ、学問論、人材育成論、教
化論に相当する教学論について、その敷衍した解釈がその中に含ま
れてくる。例示すると、「古ノ聖賢ノ道ヲ学ヒ古来ノ作法ヲ習イ知
ルト云、基本ハ今日ノ用ヲナサン為ナリ…今日新シキ事ヲ成スニ益
有ル如クナル教ヘヲ学フ学古新ヲ用ト云ナリ…」、あるいは、「人ノ
氣質ニハ強アリ弱アリ柔アリ剛アリ…是以其生質氣ニ由テ教アリ、
強ニハ文ヲ教エ弱ニハ武ヲ教エ柔ニハ威ヲ教エ剛ニハ愛敬ヲ教ユ
ヘシ。」などを意義として説述するのを見ることが出来る。素行没
後二十五年位にあたる正徳年間をひとつのピークとして以後も続く
が、後述する幕末の山鹿素水の頃に再び特に普及した。

また初学者を対象に武士の日常的倫理規範を説いた『武教小学』

は独立した写本、版本と同時に『武教全書』『武教要録』と合冊されたものが流布した。その「子孫教戒」の項は人口に膾炙した武士子弟の教育方法について記したものである。『山鹿語類』『謫居童問』にはそれを発展させた説が述べられていたが、これ等の書も兵書を補うものとして重用された点が重要である。因みに山鹿流兵学の基本書には「山鹿流十八部」などとして、「兵法神武雄備集』『武教要録』『手鏡要録』『武教全書』『自得奥義』『山鹿語類』『武事記(武家事紀)』『備教要録(修教要録)』『兵法或問』『武教余録(武教余談)』『武類全書』『謫居童問』『聖經要録(聖教要録)』『七書診解』『古今戰略考』『中朝事実』『治平要録』『百結事類』があげられている。⁽¹⁷⁾これは後述の山鹿高恒が撰述したところよりはじまったものと思われるが、これによれば、比較の上で純然と兵法書とみなしうるものは十書であり(前述した武教の意義から言って、尚経学的性格が伴うものも含まれるが)、特に『山鹿語類』『備教要録(修教要録)』『謫居童問』『聖經要録(聖教要録)』『中朝事実』『治平要録』の書は一般的には経学の範疇に入るといえるものである。即ちこれらに記される教学論が山鹿流兵学の内容だと認識していたことになる。

『武教小学』の注釈書には『武家小学』『武家小学講義』『武教小学口義』『武教小学法』等がみられる。注釈書ではあるが、原著にみる子どもの発達や個人差に即した教育方法等についても触れ、解説しているのが認められる。また子どもを対象とした教訓書として改めて体裁を整えたもの、あるいは原著に比して変化を見せ、教育

の責任が父親のみでなく寧ろ母親に有ることを強調するものや女子教育の教材として『源氏物語』等の物語文学を使用することを肯定するもの等も現われている。また吉田松陰の『武教全書講録』もこうした『武教小学』の解説書に属するものである。

前述した素行の『謫居童問』では「教育」の語を使いながら、「…出生して撫育教導詳ならずんばあるべからず。大概先づ養を本として(養を先にして)教を後にす、其の教をくはしくするにあり。凡そ人の形体幼弱の間日夜生長し、一年を以て大変す。…品々の考へ、教育あるべし。すでに一歳をふれば…此の間教育更に怠るべからず…齒のかはる時分をまことの教戒の初とす。」⁽¹⁸⁾という発達観を示していたが、それを継承・発展させたとみることの出来る説述は、津輕耕道など一部を除いては見出だせない。少なくとも解説中に反映しているものが見られない。尚それでも『武教小学』の解説書中には、以下のような記述がある。

…天然トハ請タル俣ノ処、心知未タ主トスル所アラストハ善惡トモツカス其習ハシワサ之善惡ノ機ス所甚タ慎ムヘシ…文ヲ学フ事聖賢ノ格言ヲ学ヲ身ニ行ヘキ為也…

…教戒氣質ナガラ、ヲシユニ過不及無之如ク教ヘザレバ怠リ生ジ、教ヘズ戒メザレバ、節成ラズ。…凡ソ幼年ノ間、善惡ノ移ル所、能ク心付ク可キコトナリ…母教ヘイマシメザルガ故、…驕惰ト…幼時教ヘナクソダテ…子孫ヲ教戒致ストハ、彼ガ智ノ自然ニ教、ヨコシマヲ正ス也。ヲボユル処ノ知ヲミガキ正シクスルナリ。…能ク其子ノ生質ヲ心付ケテ邪正ヲ考ヘ、闕ヲ揚ゲ邪ヲ戒メ…詞モ、何ヲ云トモ、武事

ヲ以テ申語ルガ宜シ。

凡ソ人ノ氣質千變万化面ノ如シ故ニ其質ヲ考ヘテ能ク其器ニ応ズ可
キワザヲ習学セシメテ：人品トハ、人ノ上中下ノ批判也。上人ニモ上
中下、中人ニモ上中下、下人ニ亦上中下ト、九品ニ分ル。其下品ニ成
ラザル如ク批判致テ上品ニ至ル如ク致セト云フコト也。：源氏伊勢物
語等ノ俗書：放逸淫欲ノ媒トナル。：カリニモ情弱淫楽ニ流レザルヤ
ウニ教育スベキコト也。然レドモ正教ヲ能ク弁ヘタル師ヲ以テ其意味
深ク弁ハ又カカル書モ其徳大ナランカ。⁽¹⁹⁾

素行は武士の女子教育の教材として「源氏伊勢物語等ノ俗書」と
された物語文学を適さないとしたが、この『武教小学口義』は、適
宜使い方によるとし、「我が本邦の俗を知る種ともなるべし」とし
て、編者独自の考え方を示している。²⁰ 編者は不明であるが、時代が
下った時期において時節相応の解釈を施したものとみることが出来
そうである。むしろ素行の理解との異同に関して、原著の意義が継
承されていない点が注意される。この異同の問題は、稿を改めて検
討する予定だが、『武教小学口義』について数点取り上げると、
(一)「節」の理解が、素行説に比して、発達という観点に立ってい
ない感がある。朱熹の『小学』の教育観の枠内にあると判断も出来
る。(二)「氣質」に応じた教育の必要性が説かれるが、「自然教化」
の意義の「自然」の部分の説明が弱い。(三)「可塑性に関する「中
人」説に対して、九品説をとっているが、ここでは可塑性の問題と
直接しない。という点がある。

尚、吉田松陰の『武教全書講録』における「子孫教戒」の解釈で
は、次の説述がみられた。

結末一篇乃チ子孫教戒ヲ論ス：前九篇ニ己ニ行フ者ヲ以テ、是ヲ
子々孫々永々世ニ伝フヘシト云：女子ノ教戒ノ事、先師ノ深意尤モ味
フヘシ、：又貝原氏ノ書、或ハ心学舍流ノ書等ヲ以テ教トスルアリ、
是尤モ正シク尤モ善シ、然トモ柔順・幽閑・清苦・儉素ノ教ハアレトモ
節烈果斷ノ訓ニ乏シ：女子ノ教戒ニ付別ニ一策アリ：國中ニ於テ一箇
尼房ノ如キ者ヲ起シ、女学校ト号シ：、素水ノ刻本ニ子孫教戒ノ末
ニ武教小学終トアルハ非ナリ：惣目錄ノ末ニ移スヘシ、抑惣目錄ヲ以
テ、武教ノ大綱及ヒ先師ノ学則ヲ窺フヘシ：⁽²¹⁾

ここでの特色は女子教育への関心の移行と学校論への展開という
点であろう。教育方法論自体に関しては、武的な要素を強調するも
のの、貝原益軒の『和俗童子訓』及び心学者の説が同様のものとし
て想定されていることからして、その「節」の理解などには関心が
薄かったものと思われる。尚、これによれば後述する山鹿素水の
『武教全書』の版本に注意していたことがわかる。

(二) 学統継承者の教学観

一、在世中の門人の動向

素行の在世中より側近の門人として特に貢献した者に、磯谷義言、
千田可慶、布施忠之があった。彼等は素行の傍らにあって盛んに問
答を行い、その著述を促す役割を担うとともに、その編纂あるいは
校訂等に尽力した。『武教小学』は千田、布施の校訂になり、『謫居

童問』は磯谷に素行が答える問答形式の著述である。彼等は子弟や初学者を対象とした書物の作成に対して意欲的だったことが看取される。磯谷に『武類雑稿』⁽²²⁾、千田に『寸金雜錄』⁽²³⁾等が残っているが、ともに『武家事紀』に集大成された様な古事兵法に関する談話類の編纂というものに意欲を持っていたのが目にとまる。布施忠之は学統形成の一翼を担っているものの、彼等側近の門弟は言わば編纂者としての役割に止まっていたと考えられる。

在世中の門人に津軽信政等の大名の名がみられる。元来、山鹿流兵学は為政者上層に用意された君主論としての性格が強いといえる。

当流之儀は国主城主其外頭立候衆中御勤候事にて候、平仕組付之類相勤之儀にて無之候、然共至志之衆中には、其意に任せ候儀も可有之候。⁽²⁴⁾

右の意義が「流儀成之作法並誓紙前書」に記されている。

諸大名中、浅野長直、松浦鎮信、板倉重矩、津軽信政等は素行と殊に親密であった。特に津軽信政は素行より山鹿流兵学の奥秘を伝授され、家臣に素行の血縁者をはじめとして、高恒などの山鹿流の門人を多く抱え、津軽藩での学統形成に大きな役割を果たした。

因みにこの君主対象の学としての性格は、幕末においても後述の山鹿素水が綾部藩主九鬼隆都に抜粹される経緯等に照らして重要な要素となっている。

二、津軽系学統前期

素行の甥にあたる山鹿高恒（一六四六—一七二三）は、後に素行

の養子となり長女亀の娘婿となっているが、素行の学統継承者として力があり、素行が開塾した浅草田原町の積徳堂での中心者であった。津軽藩に仕えた後は第一家老として権勢を振った。⁽²⁵⁾高恒は山鹿流兵学の武教的教学論の君主論的な面を特に取り上げて述べている。

士は三民の長たるを以て武士と云。依之、其言行不宜則三民却て賊となる故に士の教を本として、四民共に長久ならしむる也。：武の上は此教に止て、外に有之べからざるを知り、武の教、意味の深重なる事を并知也。：是士として教なきは士と云べからず。教を立るは平世の上において武士と云、勿論長久たらしむべきの本意也。⁽²⁶⁾

即ち為政者の職分を果たすための学問教養に、素行が指摘してきた武教の一般的意義を右のような記述を以て強調する。君主の修為論と教化論が並行するが、修為論では「格物致知」の解釈として、徳の内面化のために学問が要求されるとしている。

衆人の的当たらしめ、一身の明正を立ると云は、主将の身は万人の的当として一言一行皆是を学び手本とすること也。：思慮の趣を其道に才徳あらん輩を召して、其可否を前方に正し：人の慎み守る処は、人の不知所、人の不聞所に戒慎あることにして：必ず相手の無之所に義あること也。⁽²⁷⁾

学習方法に関しては特に、高恒が「思慮」と言っている学習者自身の思考が、自学を建て前とする中で独善化することを否み、充的な知識習得と師を中心とした評価・指導及び討議によって実を得るものであることを強調する。これは、「内省」よりも「知識習得」

に優位を置くという素行の朱子学批判の学習方法上の骨子を踏まえたものといえ、学問の効果が判断力の陶冶に現われることを肝要とする考え方に収斂する。学習者の可塑性、また討議の質に関わった学問的環境条件の良悪等も論じ、「花咲実なる草木も、養育又は手入仕様模様にて、其全体も格別になるものなり。：因之志士二人は田舎より都へ出てつとむるを好む事也。」とする。また学習方法には効率的な方法があると認め、「形」「習熟」「立志」「故実」「応変」の方法をとることを説いていた。「形」とは「教法形を以て本とし始とするなり。：習熟の功なし、依之其实不正也。」とあって、素行の山鹿流兵学の特色としてあげられる「形」を正すことから自然と「心」を養うとの論法に基づき、日常の作法あるいは具体的知識を確実にすることを基本に据えている。「習熟」「応変」では知識習得後の反復・応用を説き、「立志」「故実」では規範となる知識の本質に学ぶ学習態度の重要性を説いている。⁽²⁸⁾

教化論の面については、賞表を基本として時間をかけて風俗の良化を企図する趣旨が、可塑性評価を前提に表明されている。「：善には難移、惡にうつり安きものなれば、唯々善を上を専とするを本とす。惡は退に不及、おのずから退き、おのずから善にひるがへるもの也。：惡も善とひるがへること多し。善にうつるやうにしかけ、何とぞ善に入るもの多きを：」⁽²⁹⁾などの言がみられるのも、これに対応している。

他に津輕系の有力な学統として素行の門人貴田元親の系譜があり、素行の外孫にあたる津輕耕道（一六八二—一七二九）はこれに属し

ている。耕道は素行の武教の意義について詳しく説いており、また君主の学問や庶民教化のみならず、発達や個人差を考量した教育方法、注入を避ける「自然教化」の方法等にも言及していた点で重要である。一例をあげれば、「：其の極意を論ずる時は：生付と云ふべからず、皆幼少より習はすところと知るべし。其の大將若年より父祖の弓矢を見習ひ其の得失を見覚えて、或はこれを用ひ又は其の格を替ることもあり、又若年より近習老臣の物語を聞きて、自然とそれに移ることもあり、一人の成立つところ亦此くの如くなる也。：人の質には長短あり、故に長をばますます教へ短をば引立て育つる也。」⁽³⁰⁾とする人の可塑性を強調する説き方、また「幼主ヲ教導スルノ用必ズ其節アリ。其節ヲ詳ニセザルトキハ事煩シテ而モ益ナシ。而シテ其節ノ実ヲ論ズル時ハ小兒ノ年齢及ヒ文学読書等ニ泥ムベカラズ。幼君ノ智足り形調ヒ欲発スルノ節ヲ詳ニシテ其節ヲウシナハザルニアリ。若幼弱ニシテ氣質イマタ全カラザルノ間教戒ヲ嚴酷ニスル時ハ陽氣縮リ或ハ病ヲ生シ：」⁽³¹⁾のような発達を踏まえた「節」説の指摘がなされているのである。

耕道の妻は大道寺友山（一六三九—一七三〇）の娘であったが、友山も『武道初心集』を著わし、これは普及した。教育方法としての部分をみれば、左の説述がみられる。

：七八歳の年齢にも生立候に於ては四書五経七書等の文字読をも致させ手習いをも仕りて物を書き覚え候様にと、油断なく申教へ、十五六歳にも罷成候へば弓を射馬に乗り其外一切の武芸をも修練致させ候義、治世の武士、子を育つる本意たるべく候。：慈愛の誠を以て教育

に預り…武士道に二法四段の子細有之候…士法と申すは、朝夕手足を洗…書を読み字を書き武家の古実古法を心にかけ、行住座臥の行儀作法、流石武士と見ゆる様に身を持たす義に候。⁽³²⁾

友山は甲州流兵学に重きをおいている点等から学統としての繋がりは直接的でないといふが、素行にも学び、兵学の一領域として武士の教学の重要性を説き学問の方法等にわたって教学論を展開している。「自然教化」の教育方法に触れている部分もみられる。ただし対象が為政者上層ではなく一般武士へと移っているのが特色である。これらの著述は主に宝永・正徳・享保（一七〇〇年前半）年間のもので、一般武士の倫理啓蒙書的性格を合わせ持っている。

三、津輕系学統後期

高恒の学統に天保末より弘化（一八四〇年代）年間頃から顕著な活動をした素水（高補・？一八五七）が出た。⁽³⁴⁾それまでの間山鹿流兵学の学統上その勢いもやや沈滞気味というべく著名な学者も出ていない。耕道にあつても、次男の建部綾足（一七一八—一七七四）は歌人並びに国学者として知られる人物であり、教訓書も残しているが、むしろ綾足は山鹿流兵学の教学的性格を嫌い、国学へ向かったと考えられ、脱藩の事情からして学統に属していない。⁽³⁵⁾

再興者としての素水の基本思想は海防論にあり、文化五年（一八〇八）に学統を継承後、文政年間には積徳堂にあつて、その後諸国を遍歴して幕末の情勢に対応する兵学の研究に努めた。⁽³⁶⁾学統を継いだ養祖父高美（一七四四—一八一〇）（高恒の曾孫）の著を『美言

残滴』として素水が編纂しているが、そこで『武教全書』の内容に触れながら、山鹿流兵学が武教を説き且つ武具や戦法に至る具体的な兵法知識の教授を主旨としている点を強調するとともに、「補若冠ヨリ家学ヲ講ジ既ニ知名ノ齡ヲ過ルト…兵家者流ノ徒古法ヲ尊崇シ当世モ又此定格ヲ以て足レリトスルハ琴柱漆ノ誤ナラント。」⁽³⁸⁾という意識から、素行が『武教全書』で説いている「人性」に基づく人材評価説に対しても次のように述べる。

タトヘバ人ノ性五性ヲウケテ生ルルトイエドモ其生レ付ニ火ノスグルカ水ノスグルカアリ。夫ヨリシテ六品六者等ノ教モ立シコト也。是ミナ其大テイヲ教ル也。万事業ノ事実ニ至ラズ、唯道理バカリニナズンデハ戦法ノ用ニハ立ガタシヨクヨク工夫自得スベシ。察氣五ヶ条トモニ教ノゴトク氣ヲミルコト…伝来ノ味ノミニテハ見シルコトカタキ事也。却テ是ヲ味ヒスグレバ害ノミアツテ皆ソントナルベシ。⁽³⁹⁾

と述べ、それを教条的に考える事を戒め、その趣旨は汲みつつも今日相應の解釈が必要であると主張していた。傾向として、素行の観点に既にあつた「形」を重視し、実際の、唯物的な性格について、なおそこに存在している「理」的な面を捨象してより実際のな解釈を試みたものと言え、思弁的に発展した解釈に対しては批判的な立場を採っている。高美自身は藩の財政について儉約説を説き、海防について農民教諭を行なっていたが、⁽⁴⁰⁾海防の危機感を高まらせる中で洋学の驚異を兵学通じて痛感し現実的方策の案出を急務とする意識を継承したという書き方になっている。そこから武具に対して幼児からの教育によって実用的に使いこなせると説くなど、⁽⁴¹⁾実用性を

重視する考え方へと進んでいる。また同時に荻生徂徠に対しての兵学批判⁽⁴²⁾にみるように、甲州流以来の山鹿流であることの日本の学問伝統が持つ意義論も堅持しているのである。

素水は時代に応じて山鹿流兵学も旧態以前とした兵法知識に固執していただけないと考えた。中で、学校の意義については、教化的視点に立つ学校論を提供して、天保一五年（一八四四）の頃より触れていた。

学校ノ設ケ備リ武者分正シクナリタル上ニハ制度正シク嚴ナラサレハ制シカタク風俗正シクナリカタシ。其本ハ学校ニアリ学校ノ教化行ハレテ武者分正シク上下其職トシ可務ノ処ヲ能知ルナレハ武義自然ト強ク士道ノ剛操ヲミカクノ心ヲ生ス。⁽⁴³⁾

「武義正道ニ至ラシム」⁽⁴⁴⁾の意味に「練兵」による秩序維持の観点がでており、そのために「本ヨリ法ヲ立」てるべきとして、その「本」を「学校」と考え、「学校ノ教化行ナハレテ」成果を発揮するとみなした。⁽⁴⁵⁾

そして弘化四年（一八四七）より嘉永元年（一八四八）にかけて著された『海備全策』では、「講武館」の創設を提言する等具体化した学校論が現われている。

自然ト武道ニウスク文ニ流ルル処アリ。故ニ今日ニ至テハ：武徳ヲ盛ンナラシムルニアラサレハ其全ヲ得カタカラン：防海ノ武備ヲ議セラルモ其金ヲ得カタシ：講武館ヲ創造アツテ普ク天下有名煉達ノ士ヲ撰ンテ夫々ノ師職ヲ任シ実用ノ煉達ヲナサシムル時益々士氣ヲ喚起シテ太平ヲ賛スルニ至ラン。⁽⁴⁶⁾

『海備全策』の学校論は、津輕藩致仕後の全国遊歴・見聞の体験によつて大成した兵学・海防論を文政初年頃より諸藩より審問、筆記を要請され、海防策全般を要請され記するに至ったとしている。⁽⁴⁷⁾海防策の最後の巻に「分武備之宮並学校」として書かれたものである。一方同書での農兵論⁽⁴⁸⁾からみると、素行が説く庶民教化の学校は問題になっていない。

その主張を考察すると、まず各藩の兵学者並びに就学状態の低迷を指摘、「其兵ヲ奉スル者ヲ見レハ、文字モナキ固陋ノ愚者ニシテ治世ノ政務サエ任シカタキ者也。故ニ其藩士門ニ入来ルモ、才学智力アルモノハ兩三度ノ講席ニ出テハ抱腹ニモ堪ニサルヲ以テ、速カニ去リ、是ヲ尊崇シテ積年苦学スル者ハ文盲無智ノ愚者ノミ也」⁽⁴⁹⁾としている。ここで、昌平坂学問所の「文」の学問の意義に対して、「講武館」は兵学・武術を教授する学校として意義を持ち、「武」の衰退に対し、その復興のために設立されるとする。言い換えて「講武ノ大学校」「武館」「武学館」と記されている。

「講武館」設立の前提として、海防・武事に関しての「武備の府」を建て「武官」の「惣宰」による機構を建てるということに連動して「武」の学校を幕府の直轄学校として設立することを説く考えがある。また「武」の必要性の世への普及、それによる世情の「武」的教化を目的とし、江戸に設立を計画するとして、江戸の「大都会ノ盛ニナルニヨリ人浮華ニ走ルノ弊」に対して教化出来るとする。これにより相補的に昌平坂学問所も「実学」的になるとみているのである。学校の「惣宰」「師職」に武術に理解のある者、達人を流派にか

かわらず集めて（西洋兵学も含む）協力・交流・評価・研究させ、実用的見地から時節に適した教授の実施をはかるとする。学校施設を武術別に設置し教授するとともに、進捗状況の監督者を配置し、「師職」の役職等への人材登用も行ない活性化する。また学校の意義として、学校内では規律を重視し「武」的徳性を教育するとした。「師」による人格教育の場として、自学にない学校の意義をみてとろうとしている。⁽⁵⁰⁾

これは、講武所設置に対する学校論の中でいかなる位置にあったものか。素水は山鹿流兵学を、後に講武所総裁になった九鬼隆都等に教授している。海防策についてはまた阿部正弘に上書を呈している。⁽⁵¹⁾ 講武所創設は安永元年（一八五四）阿部正弘の「講武場」創設案によるとされ、これに力のあったのは、徳川斉昭が嘉永六年（一八五三）に記した意見書「海防愚存」であって、また男谷信友の功勞であつたとされている。前者は「文武学校」を所々に設立してこれに海防を兼ねさせるという構想を含んでいた。⁽⁵²⁾ 一方「海備全策」の学校論はその六年前に遡ることが出来る。昌平坂学問所と対置する構想は、阿部正弘や創設の実務担当的立場にあった岩瀬修理などの建白書などにも明らかであって、かかる学校構想は塩谷宕陰等の学校論にも看取されるもので、これ自体は海防論と一体となつた学校論の一般的な論調であつた感がある。問題は、講武所創設時に素水の弟子である綾部藩主九鬼隆都が「講武場」総裁十人の一人として活動している点であり、それ以前九鬼隆都は天保年間の水野忠邦時代に大番組に山鹿流を採用させるなどの力を持っていた。⁽⁵⁴⁾ 講

武所においても当初山鹿流兵学が教授され、『武教全書』が講義されていたが、⁽⁵⁵⁾ 九鬼は採用の発起人であり、彼によって講武所頭取になり山鹿流兵学を講義した窪田清音あるいは講武所勤番組頭安藤直章などいづれも素水の一門であつた（清音は学統の上では別系である）。素水がその創設にいかに関わっていたかについては尚検討が必要である。

四、他系学統

津輕系学統の他、嫡子高基の学統である平戸系学統を除いては、有沢永貞等金沢系学統が注目される。永貞、その子武貞、致貞兄弟の兵学は独立した有沢兵学と評価されるもので純系とは言えないが、その基礎は山鹿流兵学である。素行門人関屋政春に從つて『武教全書』の研究書を著わし、素行からも激励されている。永貞の書は元禄五年（一六九二）、武貞、致貞はそれに注釈を加え享保一二年（一七二七）に書を完成させた。『武教全書』の主旨を汲みつつも時宜相応の取捨選択を行なっている。⁽⁵⁷⁾

他、水戸の鈴木素道等が『武教全書』をモデルとして教学論を述べている。⁽⁵⁸⁾

幕末では、平戸系学統の高紹とその門人長島元長の解釈が目にとまる。⁽⁵⁹⁾ 萩藩の系統より吉田松陰が出て周知の様に山鹿流の武教を研究した。浅野の系統からは前述の講武所頭取となつた窪田清音が出て素水とともに山鹿流兵学を講じて活躍した。⁽⁶⁰⁾

結び

本論では津軽系学統を主に考察してきたが、素行の武教に基づく教学観は、『武教全書』『武教小学』とその研究という形を取りながら学統を中心に影響を与え、正徳・享保の頃までに纏められたものには、詳細な教学論が伴っていた。しかし以後例えば子どもの発達や個人差に即した教育方法等というような、より教育論的な要素というものは影をひそめ、それについての尚深めた論究などは見出だすことが困難である。

時代の推移は山鹿流兵学に時宜に相応した変化を要求したが、武教の基本的理念とその理解は連続と続いたもののようである。幕末ではもはや陳腐の感さえあつた山鹿流であつたが、講武の基礎を支える一思想として役割を果たした。

学統継承者のうち、全体的な動向を追い、特に後期における山鹿素水を中心にその展開をみたが、素行の教育論の具体的な受容と展開に関しては、津軽耕道がとりわけ重要になる。これについては、稿を改めたい。

また明治以降の『武教小学』などの受容についても一言すべきだが、これも別項に譲りたい。

註

- (1) 拙稿「山鹿素行の教学観―武教の成立を中心に―」(工学院大学研究論叢二七・一九八九年)を参照。
- (2) 山鹿流兵学の学統自体に關しての研究には、石岡久夫『山鹿素行兵法学の史的研究』(昭和五五年)がある。

(3) 山鹿流兵学における具体的な教育方法論の展開に關しては、註(1)論文を参照。

(4) 同前。

(5) 武者行勝・石岡久夫編『日本兵法全集』二・一五二～三頁。「武者草鞋」などの類書を含め、景実の記述では学習に年齢に応じた「五節」が「天性」に基づいてあるとし、可塑性の評価や幼児教育の必要性が示唆されている部分も看取されるが、発達を踏まえた随年教法には及んでいない。

(6) 兵要録・同四・四七頁。

(7) 拙稿「松宮觀山の教育論―武教を中心に―」(関東教育学会紀要二・一九八五年)参照。

(8) 武家事紀目録・広瀬豊編『山鹿素行全集』一三・六八八～七三二頁。

(9) 言綴録・同前一一・五五六頁。

(10) 拙稿「山鹿素行の学問史観―日本の学問史を中心に―」(工学院大学研究論叢二九・一九九一年)参照。

(11) 『山鹿素行兵法学の史的研究』(前掲)一三〇～一四三頁。

(12) 同前。

(13) 同前・一五〇～一九二頁参照。

(14) 同前。笠井助治『近世藩校における学統学派の研究』上・五一～三頁。

(15) 武教全書解・鈴木素道註・国立国会図書館蔵・三八丁。『武教全書』の受容形態は、藩校等での武術講義の基本書として採用される形をとりながら、内容的には経学と重なり合う解釈が多いため、経学への橋渡的な役割を担った特色を持つ。『武教全書』(『武教小学』を含む)の受容状況に關しては別に述べたい。

(16) 武教全書摘要・国立公文書館蔵・二六丁裏。

(17) 『山鹿素行兵法学の史的研究』(前掲)二・三八頁参照。

(18) 謫居童問・『山鹿素行全集』(前掲)一・二二六～七頁。

(19) 武教小学講義・慶応義塾大学図書館蔵・二二丁裏。

(20) 武教小学口義・井野辺茂雄編『武士道全書』三・一三三～一三四頁。

(21) 武教全書講義・広瀬豊編『吉田松陰全集』三・一二三～一三〇頁。

(22) 武類雜稿目録・国立公文書館蔵。「戦時 天戦 戦地 戦法 戦計一 戦計二 戦計三 戦計四」とある。

(23) 寸金雜録・早稲田大学図書館蔵。

(24) 流儀成之作法並誓紙前書・『山鹿素行全集』(前掲)補遺・四頁。

(25) 前野喜代治「津軽藩の文教と素行の学統」・神道学一〇八。

- (26) 武事提要・『武士道全書』(前掲)五・二二～四頁。
- (27) 同前・三七～八頁。
- (28) 同前・五五～六頁。
- (29) 同前・四一～二頁。
- (30) 武教全書諸説詳論家伝秘鈔・広瀬豊編『山鹿素行兵学全集』四・三一頁、五一頁。
- (31) 輔佐要論・弘前市立図書館蔵・二七丁。近世前期・中期にかけての「幼主輔養」説であるが、その特色も含めて別稿で検討したい。
- (32) 武道初心集・上村勝弥編『大日本思想全集』三・二三四～九頁。
- (33) 古川哲史「大道寺友山について」一・二(思想二四六・二四七・昭和一七年)。
- (34) 生年は『南窓閑語』(国立国会図書館蔵・一丁)、『兵制新書』(国立国会図書館蔵・一丁)の記述から判断すると、寛政中頃一七九五年前後と推定される。
- (35) 中村稔子「建部綾足年譜」(連歌俳諧研究二・昭和三十一年。杉浦正一郎「寒葉齋涼岱の一面―国学者としての綾足について」(南画観賞二〇一八・二〇一十・昭和一八年)。
- (36) 「文政四年横徳堂主山鹿高補」(美言残滴・『武士道全書』(前掲)別巻・六〇頁)の記が見られる。「文化ノ始メ西夷東奥ヲ侵略セシハ余末タ志学ノ齡ナラサレトモ、祖父国ヲ任トシテ専ラ事ニ預リタレハ耳底ニ残ル事多シ」(南窓閑語・前掲・二丁裏～二丁表と高美の学統を継承する意識を伝えている)。
- (37) 同前・二四頁。
- (38) 兵制新書・(前掲)・一丁。
- (39) 美言残滴・(前掲)・三五～七頁。
- (40) 弘前藩三蔵での農民教諭を指す(同前・五三～五九頁)。
- (41) 同前・五〇～二頁。
- (42) 同前・三一頁。
- (43) 小備指掌・国立国会図書館蔵・二丁、八丁。
- (44) 同前・七～八丁。
- (45) 兵学者に対する批判(同・一七丁～二一丁)、城下に遠い者の就学について言及している部分がみられる(同・一二～一三丁)。
- (46) 海備全策・住田正一編『日本海防史料叢書』一・三〇四～三〇六頁。同前・三一・二頁。『南窓閑語』(豊後藩梶原景之等により弘化元年(一八四四)、『兵制新書』(津藩長井千之助により弘化三年～四年(一八四六～四七)等、要請により記した建白書である。
- (48) 海備全策(前掲)・二二〇頁。
- (49) 同前・三〇二～三頁。
- (50) 同前・二九七～三一二頁。
- (51) 山鹿素行上書・嘉永三年(一八五〇)・国立公文書館蔵。ただし本書には学校論は見られない。
- (52) 『山鹿素行兵法学の史的研究』(前掲)・二一九～二二五頁。倉沢剛「幕末教育史の研究」一・四〇〇～四〇七頁。『日本教育史資料』七・六七頁。講武場創設監察評議・勝安房「陸軍歴史」一八・五～一〇頁。
- (53) 拙稿「塩谷右陰の教育観に関する考察―人材育成論を中心に」(早稲田大学教育学部学術研究三五・一九八六年)。
- (54) 『東京市史外篇三・講武所』(昭和五年)・九九～一〇二頁。
- (55) 『素水の『武教全書』』版本の普及であるが、講武所の教科書として『武教全書』が流布する。しかし、「講武書院」版となっているのは、版行年(例えば嘉永二年・一八四九)からして、講武所とは無関係とみなすべきかと思う。万延元年(一八六〇)のものに「昌平坂」の印がみられる。学問所で使用されたものか。
- (56) 関屋政春も素行に就いて熱心に問答を重ねた一人である(『山鹿素行全集』(前掲)十一・四六一頁等参照)。
- (57) 有沢教貞・枢密要論抄・『武士道全書』(前掲)別巻・六五～一〇頁。
- (58) 鈴木素道『武教全書解』(掲出)。
- (59) 長島元長・三重伝並六物・『武士道全書』三・三五三頁。同・武教本論(弘化元年版・都立中央図書館蔵)等に教學論の展開をみることが出来る。
- (58) 窪田清音の『武教全書』の注釈書は天保一四年頃にまとめられているが、その後講武所のいわば教科書として刊行されている(『武教全書詳解』(万延元年)・国立国会図書館蔵等)。これには「書籍ノ伝口授ヲ以テ其事理ヲ述ルト雖容易ニ納得ナシ難シ故ニ形ナ有物ヲ以テ教ユルベキハ教ヘ安ク又学ビ易シ」とあって、模型を使うことが書物のみによる学習に勝る点を指摘するなど教材提示上の工夫について若干言及されている(同書巻二・一六丁)。
- 尚、本研究は一九九三年度の特別研究費による成果の一部を含んでいる。